



将棋界の歴史的な日を目の当たりにして

この原稿を書いている2013年10月11日、プロ将棋棋士の藤井聡太名人・竜王が、自身が唯一所持していなかった王座のタイトルを獲得し、八大タイトルを全て獲得するという偉業を成し遂げ、将棋界にとって歴史的な日となった。将棋を嗜む者の端くれとして、長年将棋界の動向をチェックしてきたが、羽生善治さんが27年前に全タイトル制覇を成し遂げて一大ニュースになった時と比較しても、近年の将棋の認知度や親しみやすさは格段に上がっていると思う。最近では、「将棋めし」や「観る将」といった言葉が出現し、将棋の棋譜や勝敗よりも、棋士の所作、キャラクター、趣味や趣向などに興味を持つ人も現れ、他のボードゲームと比較しても、異例の盛り上がりを見せていると思う。それも、日進月歩で進歩するAIの積極的な受け入れと迅速な活用、誰もが気軽に観られるライブ視聴コンテンツの充実、棋士の先生一人一人が様々な形で熱心に行ってきた普及活動などがうまくパズルのようにはまり、結実した結果だと思う。少子化に伴って、それでも将棋人口は伸び悩んでいるようであるが、今回の藤井八冠誕生により、国内外の将棋への関心の更なる高まり、スポンサー収入の増加、関連商品や書籍の売り上げ増など、将棋界の未来は明るいと言っても差し支えないように思う。

そんなことに思いを巡らせながら、翻って、生化学、あるいはもう少しマクロな視点で、アカデミックのサイエンスを取り巻く状況について考えてみた。世の中の関心が高く、明るい話題として取り上げられやすいのがノーベル賞であるが、ここ十数年で、生理学医学賞だけで見ても、2012年に山中伸弥先生、2015年に大村智先生、2016年に大隅良典先生、2018年に本庶佑先生と、4名もの先生方が受賞されている。この受賞はいずれも大きく報じられ、日本発のサイエンスの素晴らしさが一般の方にも浸透した良

い事例だと思われる。ただし、4名の先生方は揃って、日本の科学（特に基礎研究）の今後の衰退を危惧されていて、その点はおそらく、他の研究者だけでなく、世の中全体としても概ねコンセンサスがあるところだろう。しかも、その解決策の糸口は、未だ見えていないように思う。少子化、日本経済の衰退といった日本という国全体の問題から、日本の研究力・論文数の低下、博士進学者の減少、アカデミアのポストや人材不足など、科学界の問題まで、一朝一夕に解決できない問題が山積していて、途方に暮れるような状況である。もちろん、一介の若手・中堅研究者の私などが知らない根深い問題や、その解決に向けて知恵を絞り、奔走している方々の存在があるはずで、このコラムで私ごとがあえて話題にするようなことではないのかもしれない。それは重々承知の上で、将棋界の最近の盛り上がりを見るにつけ、最先端のサイエンスや研究者という職業が、一般の人にとってもっと身近に分かりやすく感じられるような我々研究者による工夫や努力が、まだまだ現状では不十分なのは、と思わされることがある。サイエンスに対する一般の方の垣根が将棋よりもはるかに高い分、尚更そう感じる部分はある。ただ難しいのは、将棋は普及活動そのものに直接的な金銭的対価が得られたり、スポンサー収入や将棋人気に繋がるという目的を見出しやすかったりする一方、研究のアウトリーチや普及活動というのは、もちろん色々な形での支援が存在し、実際に様々な形で行われてきてはいるものの、研究者にとっての目に見えるメリットにはつながりにくい点である。また、教育・研究活動、デスクワークなど、日々の仕事に忙殺されている研究者が大半なのが実情であり、実際にそういったプラスアルファの活動に目的や時間を見出せないのは仕方ないとも思う。研究者は人気商売ではないのかもしれないが、将棋以上にサイエンスを愛してやまない（と自負する）私としては、先々の科学界の暗い見通しを思うと、子どもが将来就きたい職業で、研究者が毎回のようにトップ10に入っているこのご時世、その人気にどうかあやかれないか、研究者一個人として何かできる次の一手はないだろうかと思いつつ思いながら、藤井八冠誕生の瞬間をライブ中継で見届けた次第である。

(一歩千金)